
第 2 話

手乗りタイガー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第2話

【Nコード】

N2909M

【作者名】

手乗りタイガー

【あらすじ】

運命の赤いとんかつ 前編 の続きです

運命の赤いトンかつ?!「後編」

【夜8時】

……ガチャ

大河がやって来た。

「よっ」

軽く挨拶を試みる

「……」

もちろん無反応。

カチ……カチ……カチ……。

時計の秒針の音が

沈黙に拍車をかける。

何時間たっただろうか

いや、実際には2分くらいしか
経ってないんだろうけど、

この2分は1時間にも2時間にも感じられた。

「…な、なあ大河、とんか」

「別れよう」

「……っ！」

先に口を開いたのは俺だった……
しかしそれを征するかのように
大河が別れの言葉を口にした。

「！大河…っ…！何言っ…」

「ばいばい……」

そう言っ…大河は部屋から出ていった……。本当は引き留めた
かった……。でも、突然のことすぎて脳も体も動かなかった……

まただ……。また

あいつを1人にしちまった。

ずっと一緒にいたのに…

気づいてやれなかった

聖夜祭の時に…

修学旅行の時に…

もう絶対、

大河を1人にさせないって

決めたのに……。

くそっ……!!

今度掴んだら、もう絶対離してやんないからな!!

「……っ!」

俺は走って家を出た。

く大河目線く

く2月24日く

今日は竜児と2人で近くのスーパーまで買い物にきている。

そして今、

私はトイレの個室で

1人うかれている

《竜児と買い物かあ。

なんか…デートみたい

…それにここに来る途中、

私のこと…か、可愛いつて言ってくれたし…

あの時は恥ずかしくて

目潰ししちゃったけど、

本当はとっても嬉しかった。本当、竜児に出会えてよかった

ありがとね、竜児《

すると突然、トイレの
ドアが荒々しく開いた。

私は1人、のろけていたので
びっくりした。そしてその足音は私の隣の個室へ入っていく。

「…高須……君っ
やっぱり私、無理だよ。」

《…みのりん！？泣いてる??》

「大河とのこと、……応援……してる……はずなのに、応援するって、
決めたのに……私……やっぱり……高須君が………好きだよ！」

「……っ!!」

《私、なに浮かれてるんだろ……

親友のみのりんが……大好きなみのりんが、こんなに苦しんでるのに
……っ

私なんか、竜児と幸せになっていいの??

私1人だけ、いい思いをしていいの?》

気づけば私はトイレを飛び出した。その刹那、トイレの前で
誰かとぶつかったけどそんなのどうでもいい。

あいつは何も知らないから、
当たり前なんだけど、私がトイレから帰って来た後も、あいつは……
竜児はいつも通りに接してきた。それがなんだか嬉しかったようで、
切なかった

く2月27日く

【学校帰り】

私はあの日から3日間、竜児と別れるべきなのかずっと悩んでた……。

そのせいで、竜児にどう接すればいいのかわかんなくて……この3日、竜児のこと

ずっと無視してた……。

そして今日、竜児に家に来てって言われた……。

きつと愛想尽かしちゃったんだろうな。

わがままで、暴力的で、ドジな私なんかに……

……だったら丁度いいや。

ふられるくらいなら、

私から……別れを告げよう

【夜10時】

私はいつかの橋で独り泣いていた

これでいいんだ……これで……

竜児もそれを望んでいただろうし。私の事なんか……もう嫌いになつちやっただけ……。

く竜児目線く

く2月27日く

【夜8時半】

「大河……！いるなら返事しろー！」

俺は独り、暗闇の中で大河を探している。大河は家にはいなかった。つまり、外にいるということだ。

こんな寒いのに……風邪引いたらどうするんだよ！

「あゝら、高須君、
何してるの？」

「えっ?!」

突然声をかけられた

「川島?!」

そしてそこにいたのは、クラスメートの川島亜美だった。

「そ、そっちこそ……こんな時間に何してんだよ?」

「亜美ちゃんは、高須君に会いに来たんだよ」

「なっ! からかうために来たなら帰ってくれ! 今、忙しいんだ」

「何よお?? その言いぐさは？」

せつかくタイガーの様子がおかしい理由を教えてあげようと思ったのに。」

……!

「な、何か知ってるのか!？」

「まあね……。亜美ちゃん、3日前にスーパーに買い物に行ったのよ……それでちよっとトイレに行ったら……中からみのりちゃんの泣き声が聞こえてね……その……高須君のことがやっぱり好きだって……タイガーとのこと応援してるけど、私もやっぱり高須君が好きなので言ってる……したら急にドアが開いて、タイガーが飛び出してきて……タイガーも泣いて……タイガーは私には気づいて

なくて、相当ショックだったんだと思う……。もちろんみのりちゃん
は私にもタイガーにも気づいてない……………」

「それで大河の様子がおかしかったのか……………。俺と別れよう
したのも、櫛枝のため……………」

「そう言うことだよ、高須君……」

俺の言葉に返事をしたのは川島ではなかった。

「く、櫛枝!？」

「ごめんね……高須君。私、高須君から聞いてたから大河がトイレに
いることは知ってたのに……。そんなことすら忘れちゃってて……本
当ごめん!」

「なんで櫛枝が謝るんだよ!櫛枝は何にも悪くない!…………いや、誰
も悪くなんかないんだよ!だから……もう謝るなよ」

そう言った後、櫛枝に1歩近づく。

「来ちゃダメ!」

「……!」

「それ以上、近づいちゃダメ!
高須君は……大河の所へ行つて!」

「…………え…………でも…………」

「いいから!!」

“お前の気持ちはどうなるんだよ??”

そう続けようとした俺を
櫛枝が征した。

「……………!!」

「高須君なら……………きっと、大河がどこにいるのか分かるはず。どんな暗闇でも、どんな逆境でも、誰より先に！大河を探し出して…見つけてあげられるはず。高須君じゃなきゃダメなんだよ！」

《……………ごめん、櫛枝!》

その言葉は敢えて口には出さず、俺はその場を走り去る。

《バレンタインデーの時もだった川島に…北村に…櫛枝に…

背中を押されて、俺はようやく

自分のやりべきことに気がつく。俺は…本当に大バカ野郎だ!》

「待ってるよ、大河!!絶対、お前を見つけてやる」

《大河が行きそうな所……………!橋だ!2人で告白した、あの橋だ!》

「よかったの?高須君のこと、行かせちゃって……………」

「し、仕方ないよ…2人は……………2人は……………っ……………!」

「別に無理して言わなくていいわよ。」

「あーみん…ありがと。」

【夜10時15分】

「はぁ……はぁ、着いた」

そこには、体育座りで膝を抱えて真っ赤に腫らした目をしながら、
尚も泣いている…

“あいつ”がいた。

「竜児……竜児、ごめん、ごめんね……」

俺の姿に未だ気づいてない“あいつ”を俺は後ろから優しく抱き寄せる。

「ばーか。…もう泣くんじゃねえよ………大河。」

「えっ！？りゅ、竜児！？な、なんでここに……」

俺は立ち上がって、
まだ座っている大河の両肩を
優しく掴んで立たせる。

「話は全部聞いた…。お前は悪くない……。だからもうあんなこと言つなよ。お前のためにも………櫛枝のためにも」

「…っ！……で、でも竜児は私と別れ話をするために家に呼んだんじゃ…。」

「そんな訳ねえだろ！俺はただ…お前が……大河が元気がなかったから……その…あの日食えなかったとんかつを食べて元気づけようと思っただ。」

「…！竜児……。」

…でも…やっぱり…」

「俺達が別れたら、身を引いてくれた櫛枝の気持ちはどうなるんだよ！」

「…っ…！」

「実は3日前、俺も櫛枝に会った、その時に言われたよ、大河を泣かせちゃダメだよって……。それが櫛枝の覚悟だ！その気持ちを無駄にしないためにも！俺達は幸せにならなきゃいけないんだ！」

「りゅ…う…じ…竜…児…竜児！」

大河は何かが吹っ切れたように俺に抱き着いてきた。

「本当、バカな奴だよな…お前は…なんでも1人で抱え込みやがって。……お前はもう1人じゃないんだ。川島も、北村も、櫛枝も…それに俺だっている。」

「…ありがとう、竜児。」

「……おう。」

そう言っただけ俺は右手を差し出す。

「……／＼」

大河は恥ずかしそうに左手を差し出す……。

大河の頬は夕日と同じ、紅色に染まっている。

帰り道、大河は突然、何かを思い出したように言った

「ていうか、なんであんたが女子トイレであつたこと知ってたのよ？聞いたって言つてたけど……まさかあんた、私の後をつけて、女子トイレまで来てたんじゃないでしょうね？！」

「んなつ……！そんな訳ねえだろ！！川島から聞いたんだよ！」

「バカチーから？！なんでバカチーが知ってるのよ！？」

大河はさっきとはうって変わって俄然、元気だ。

「川島はトイレの外でずっと話を聞いてたんだよ。お前がトイレから飛び出した時にぶつかった人も川島だ。」

大河は急に恥ずかしそうな顔をする。

「ていうことは……私、バカチーに泣き顔見られたの？！……最悪……。どうしてくれるのよ！？」

「なんで

俺のせいになるんだよ？！」

「まったく……許して上げるから早く行くわよ、グズ犬。」

「グズ犬って……って言うか行くってどこに？？」

「あ、あんたの……竜児の家に決まってるでしょ！ー！一緒にとんかつ食べるんじゃないかったの！？」

「…えっ?!」

「……は、早く行くわよ。

あ……べ、別に私があんたと一緒にいたいとか、

そんなんじゃないわよ?!

たたた、ただあんたが

一緒にいたいなら一緒にいてあげてもいいって言うかノノ

……で、でも別に私も一緒にいたくないとかではないって言うかノノ
そのノノ……ゴニヨゴニヨ……ノノ」

大河は恥ずかしそうにしながら俯いている。しかも顔は真っ赤だ。

「大河……。」

もし……俺がお前と出会えてなかったら……

なんて考えられないし、

考えたくもない。

それが……答えた。

だって……、

お前が……俺のすべてだから。

「な、何よ?! / /」

「あのさ……ありがとな」

「なっ! 何よ急に / / 本当……竜児はずるいのよ……。」

「ん?? なんか言っただか??」

「ななななんでもない!! なんにも言っていない!」

「わかったわかった。」

「……だから早く行くぞ。それにこんな所にずっといたら風邪引くしな」

「う、うん / /」

「……大河の顔は真っ赤だ……しかし、2人の手と手は今も、しっかりと繋がれている。……ちょうど、あの時のように。」

f i n

運命の赤いトンかつ?!「後編」(後書き)

駄文でしたが最後まで読んでくれてありがとうございました。
これからも第3話からを連載していきたいと思えます。

でわっ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2909m/>

第2話

2010年10月13日15時42分発行